

災害資料としての『軍医学会雑誌』

——1896年明治三陸地震を例として——

村 岸 純
佐 藤 裕 亮

要旨

本研究の主眼は、明治期の陸軍衛生部が遺した資料中、『軍医学会雑誌』に掲載された1896年明治三陸地震関係の資料に注目し、災害資料としての活用の道を拓くことにある。

本稿では、まず『軍医学会雑誌』を対象として調査を行い、沿革など基本的な情報を整理した上で、当該雑誌の中に認められる明治三陸地震関連記事を取り上げ、当該資料により被災地に派遣された軍医の氏名や所属、派遣地、派遣時期や、被災者の治療状況等を明らかにしうることを確認した。

従来、明治三陸地震については、被害の大きさや復興過程が着目されてきたが、今後、当該雑誌を活用していくことで被災者の治療状況等についても一層明確になることが期待される。

はじめに

明治期の陸軍衛生部については、軍事史や医学史の側に研究の蓄積が見られるが、陸軍衛生部の学問的機関として創設された陸軍軍医学会の機関誌『陸軍軍医学会誌』『軍医学会雑誌』と、その後継にあたる陸軍軍医団の『軍医団雑誌』（以下、「雑誌」と総称する）を活用した研究は必ずしも多くはない。

これまでにも、軍事史や医学史に関する研究や軍医個人の事績考証の材料

として「雑誌」が用いられるケースはあるものの、歴史学の側からその分析の意義を強調したものは、原田敬一「軍隊と医学・医療」のほかはあまりみられない¹⁾。原田論文では『軍医団雑誌』分析の意義について言及する中で、軍医の役割を「平時戦時に病気や負傷の治療を行い、軍隊の健康を維持することである。もう1つ重要なのは、徴兵検査に関与することである」として「雑誌」に掲載された記事を例示しながら、選兵問題と脚気問題を中心に取り上げている。もちろん、雑誌所掲の記事や報告の中には、この二つの主題に当てはまらない記事も多く含まれており、研究者の側の関心の持ち方により資料としての活用の方途は、まだ大きく開かれているといえる。

たとえば、陸軍軍医としての経歴をもつ人物を取り上げようとする場合、陸軍衛生部や陸軍軍医学会、陸軍軍医団等の各種刊行物を利用する必要がある。陸軍軍医としての森鷗外については山田弘倫の著述に詳しいが²⁾、戦後は、大石汎『日清戦争中の森鷗外』、同『美神と軍神と』が、陸軍衛生部資料を活用しつつ日清・日露戦争における鷗外の事績について考究している³⁾。軍医の事績について言及する際にこうした資料が活用される例は多く、近年のものとしては横川徳郎（唐陽）の事績を紹介した佐藤裕亮『鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽』や⁴⁾、言語問題一般に関心を持っていた軍医・下瀬謙太郎に関する論考を収めた安田敏朗『近代日本言語史再考V』などがある⁵⁾。また、事件・事故に関する研究例としては、明治35（1902）年の八甲田雪中行軍遭難事件について、医学的見地から『陸軍軍医学会雑誌』所収の記事やその他の資料を博搜しつつ、第五連隊編纂『遭難始末』の記述を批判した松木明知の一連の研究が知られている⁶⁾。

以上のような研究例からもうかがえるように、「雑誌」だけではなく、新たな資料の掘り起こしや、陸軍衛生部関係資料の全体を俯瞰して利用しているとする姿勢がまず重要な点はいうまでもない。しかし「雑誌」が、陸軍衛生部やこれに所属する軍医の関心の所在や、その足跡を明らかにし、彼らがその時々直面した戦争や災害に対しどのような対応してきたのかを知る、有力な手がかりである点はゆるがない。十分な史料批判のもとに活用の道を拓くことができれば、関係する研究領域へ新たな研究材料を提供していくことも可能となる。

平成 28 (2016) 年に熊本地震が発生し、明治 22 (1889) 年に発生した明治熊本地震の存在が注目されたことは記憶に新しい。明治期の事例に関する研究は、被害調査の報告⁷⁾、津波災害から教訓を得る報告⁸⁾や都市計画の策定といった街の復興に関する報告⁹⁾があり、近代に入ると地震の計器観測が始まることから、地震学的な研究例も増加する。明治三陸地震研究の場合、行政側の資料である『巖手県海嘯状況調査書』『宮城県海嘯誌』や、遠野町の山奈宗真による被害調査¹⁰⁾の詳細な記録があり、それらの資料を用いた研究がすでにいくつかの成果を生んでいる。しかし、陸軍による被災直後の救護活動状況の実際については、必ずしも明確ではないようである。

そこで本報告では『軍医学会雑誌』に注目し、雑誌の沿革など基本的な情報を整理した上で、主として 76～78 号に認められる明治三陸地震関連記事に注目して若干の分析を行い、資料としての可能性を示すことで、今後の研究の基礎としたい。

1. 軍医学会雑誌の沿革

まず調査の対象となる『軍医学会雑誌』および『陸軍軍医学会雑誌』『軍医団雑誌』の性格について整理をしておきたい。

雑誌の沿革については、陸軍軍医学校の編纂課員として雑誌編纂の実務を担当した経歴をもつ渋谷豊盛の「軍医団雑誌顛末記」や原田論文が『軍医団雑誌』第 1 号 (1909 年 3 月) に掲載された森林太郎「分団長に示す辞」を引きつつ解説しているが¹¹⁾、その他に注目すべき記述として、昭和 11 (1936) 年 12 月に陸軍軍医学校が発行した『陸軍軍医学校五十年史』の中に次のような一文がある。

軍醫團雑誌ノ起源ヲ尋ヌルニ頗ル古ク、吾等ノ先輩諸氏『獨學友ナキ時ハ固陋寡聞ナリ』トノ語ヲ引キ、明治九年既ニ醫學會ヲ設ケ學術研究ノ道ヲ開キ、次テ明治十一年一月ニ至リ之ヲ獻功醫學社ト名ケ社則ヲ改良シ課目ヲ選定シ、公刊雑誌トシテ陸軍醫學雜誌ヲ發行シテ第一號ヨリ第十一號ニ及ベリ。惜哉爾後同盟諸氏各地ニ轉職シテ其數ヲ減ジタルヨ

り一時廢絶ノ姿トナレリ。明治十七年六月長瀬一等軍醫正主トシテ之ガ再興ヲ謀リ、在京軍醫ヲ偕行社ニ會シ衆議ヲ以テ之ヲ軍醫學會ト名ケ、會則ヲ定メ毎月火曜日ヲ以テ偕行社ニ會シテ軍陣醫學ヲ講演シ、之ヲ順次ニ刊行シテ軍醫學會雜誌ト命名シ全國軍醫ニ頒ツニ至レリ。該誌ハ號ヲ重ヌルコト百七十五號ニ及ビ、明治四十二年森林太郎氏醫務局長ノ時、新シク軍醫團ノ組織成リテ軍醫學會ヲ解散シ、從來ノ軍醫學會雜誌モ軍醫團雜誌ト改名シ、明治四十二年三月其創刊號ヲ發行セリ。

當時、森軍醫團長ノ分團長ニ示ス辭ニ此事ヲ詳述シアルヲ以テ茲ニ轉載セントス¹²⁾。

以上の記述によれば、軍医たちの間で自発的団体の結成が試みられたのは、明治9(1876)年の「医学会」を嚆矢とし、明治11(1878)年1月には「献功医学社」と改め、公刊雑誌として『陸軍医学雑誌』を1号から11号まで刊行した¹³⁾。その後、一時廢絶するが明治17(1884)年に研究団体の再興が図られ、「軍医学会」を結成、会則を定めて毎月火曜日に偕行社において軍陣医学の講演を行い、これを順次刊行して『軍医学会雑誌』として全国に頒布している。のち明治42(1909)年1月の「陸軍軍医団規則」と陸軍軍医団の結成に伴い学会は解散し、雑誌も『軍医団雑誌』と名を改め再出発することになった、という。

なお『陸軍軍医学校五十年史』における上記引用箇所の直後には、陸軍軍医学会が陸軍軍医団として再出発するにあたりその意義を述べた、森林太郎「分團長に示す辞」が収録されている。この一文については、原田前掲論文に詳しく言及されているので詳論は避けるが、改組の段階で、現役・予備役等を含めた軍医の総数が5,000人を超える勢力であったことや、『軍医団雑誌』に現役と予備役・後備役の軍医を繋ぐ「通信機関」としての機能が期待されていた様子がかがえ、興味深い。「陸軍軍医団規則」によれば、陸軍軍医団は他の一般兵科の将校団とは異なり、現役と予備役・後備役で一つの軍医団を組織することになっており、「分團長に示す辞」の書きぶりは、そのことを十分に意識した内容になっている¹⁴⁾。

では、前身の陸軍軍医学会に対する予備役・後備役の関わりはどうであったのか。今のところ、そのあたりの事情について明確に述べたものを見出せ

ずにいるが、「分団長に示す辞」の中に、

既往ヲ稽フルニ我等陸軍衛生部將校相當官ハ現役ニ居ル限ハ衛生部教育團アリ軍醫學校アリテ學術ヲ鍊磨スルガ故ニ彼ノ補助機關タル軍醫學會ニ要求スル所甚ダ大ナラザリキ、又戰時同僚ノ大部分ヲ占ムベキ豫後備役者ニ至リテハ短期ノ勤務演習ニ召集セラルルコト僅ニ一再ニシテ學會ノ集同ニ參シ其雜誌ヲ讀ムモノハ頗ル稀ナリキ然ルニ今ヤ在職ヲモ在郷者ヲモ一團ニナシテ互ニ士氣ヲ振作シ學問ヲ獎進スルコトヲ得ルニ至レルハ實ニ此ノ舉新ノ結果ニアラズヤ¹⁵⁾

とあることから、陸軍軍医学会を通じた現役と予備役・後備役との連携や共同は、かならずしも十分ではなかったとみられるが「學會ノ集同ニ參シ其雜誌ヲ讀ムモノハ頗ル稀ナリキ」いう文言からは、予備役や後備役の軍医たちが学会の活動から除外されていたわけではなかったことも読み取れる。

また富士川游編『東京医事一覽』（明治23年版）の「学会」の項にも、明治23（1890）年の陸軍軍医学会に関する情報として、次のような記載がみえる。

目的	陸軍醫官藥劑官共同シテ互ニ學術ノ進歩ヲ規畫ス
事業	毎月一回集会ヲナシ且雜誌ヲ発行ス
役員	會長 石黒忠憲
	幹事長 石坂惟寛
	幹事 足立寛、永松東海、落合泰藏、森林太郎、有馬太郎、中島一可
	指名幹事 森林太郎、芳賀榮太郎
會費	毎月金十錢
會員	現役醫官及藥劑官并ニ其豫備後備ニアル者 ¹⁶⁾

この資料からも、陸軍軍医学会が現役ならびに予備役・後備役の軍医たちを含む団体として活動していたことが確認できる。

なお同資料には陸軍軍医学校や東京衛戍病院、陸軍軍医団雑誌、陸軍省医務局の基本的な情報がそれぞれ学校、病院、雑誌、官庁の項に記載されており、就中、「雑誌」の項には同時代の医学系雑誌22誌中の1誌として以下のように記述されている。

名称 陸軍々醫學會雜誌
 紀事 醫學
 発行度数 毎月一回
 発行所 [なし]
 発行人 落合泰藏
 編輯人 落合泰藏

さて、『軍医団雑誌』として再出発した雑誌は、寄稿数の増加に伴い昭和5（1930）年1月に発行された199号より紙型を四六倍判に改め、諸外国の軍医団からの雑誌交換に応じるために昭和6（1931）年1月発行の200号より外国語の抄録を付すようになった。さらに昭和9（1934）年4月9日には雑誌編纂に関する会議を開催し委員、委員会内規及びその細則を定めた。『陸軍軍医学校五十年史』には会議席上における小泉親彦軍医団長の訓示が収録されている。同年9月12日には再度編纂会議を開催して、新たに口絵の掲載や団報欄設置等を定め、1か月に5,600部以上を発行するまでに成長し、「雑誌」は陸軍衛生部の機関誌として学術研究・団員親睦の両面において役割を果たすようになった。編纂体制にも変化があり、昭和11（1936）年8月には陸軍省医務局から陸軍軍医学校へ編纂業務が移管されている¹⁷⁾。

次に、先行研究とこれまでの小考を踏まえて「雑誌」の変遷について整理しておきたい。明治19（1886）年に刊行が開始された『陸軍軍医学会雑誌』以降の変遷を原田論文所掲載の表「軍医学会雑誌の変遷」に基づき示せば以下のようなになる¹⁸⁾。

『陸軍軍医学会雑誌』 陸軍軍医学会、1号～67号

明治19（1886）年1月～明治27（1894）年3月

『軍医学会雑誌』 陸軍軍医学会、68号～175号

明治27（1894）年4月～明治42（1909）年1月

『軍医団雑誌』 陸軍軍医団、1号～378号

明治42（1909）年3月～昭和20（1945）年

上記3誌のうち、初期の『陸軍軍医学会雑誌』を所蔵する館は少ないが、陸上自衛隊衛生学校「彰古館」や、東北大学・新潟大学・金沢大学・大阪大学の医学部図書館に比較的まとまって所蔵されており、国立国会図書館にも

『陸軍軍医学会雑誌』『軍医学会雑誌』『軍医団雑誌』（一部欠号あり）がマイクロフィッシュ化され一般の利用に供されているが、索引等が完備されていないこともあり、検索・閲覧の面で不便な点もある。なお、総目次については、国立国会図書館の調査によれば、『陸軍軍医学会雑誌』1号～67号と『軍医学会雑誌』68号～83号までは『軍医学会雑誌』84号の附録として¹⁹⁾、『軍医団雑誌』については何巻の附録であったかは不明ながら1号～210号まで収録したものがあつたもの²⁰⁾、それ以外の部分を網羅したものは、少なくとも国立国会図書館の蔵書中にはないようである²¹⁾。

2. 明治三陸地震に関する記述

調査の結果、明治29（1896）年6月15日に発生した明治三陸地震については『軍医学会雑誌』第76号、77号、78号²²⁾に該当記事が確認できた。このうち76号（pp.786-787）には明治29（1896）年6月29日時点でのデータとして、被災地に第二師団より派遣された軍医の姓名が報告されている（表1）。また、第二師団の他にも東京軍医学会より派遣された軍医もおおり（表2）、同軍医学会の軍医や看護人等は同年6月24日午後2時30分上野発の汽車で盛岡に向かったことが記されている。

明治三陸地震時の救護記録については第77号にまとめられている。

第77号（pp.951-1011）には、「第

表1 第二師団より派遣された軍医

階級	氏名
陸軍一等軍醫	鶴田禎次郎
	齋城捨之助
	大橋豊吉郎
	中村常三郎 中館長三郎
陸軍二等軍醫	岡田穎齋
	奥谷虎彌太
	飯田祐治
陸軍三等軍醫	松井昌親
	牧野康二
	正木春次郎
	梶川兼三郎
	加治安正
	井上精則
	郷右近輔四郎
	井上好
	岡崎松太郎
吉井虎之助 川島慶治	

『軍医学会雑誌』第76号（pp.786-787）より作成

表2 東京軍医学会より派遣された軍医

階級	氏名
陸軍一等軍醫	都築宗正
陸軍三等軍醫	横井忠國
	渡部卓哉
	長尾半
	横川徳郎

『軍医学会雑誌』第76号（pp.786-787）より作成

二師團軍醫部海嘯遭難者救助報告」が被災地に派遣された軍医からの報告として16回にわたり掲載されており、明治29（1896）年6月18日の第1回から、明治29（1896）年7月13日の第16回まで、ほぼ1か月にわたる活動報告が示されている。

一方、第78号（p.1173）には、被災地へ派遣した軍医の往復にかかった費用等の経費について岩手県に請求し、公務執行に準じて国庫より支出されるとの報告があったと記載されている。

以上の詳細については、稿を改めて論じるが、「別ニ都築君ヨリハ一行ノ治療ニ係ル傷者及發見セル死躰等ニ就テ傷部ハ勿論全身状態ヲモ書キタル數多ノ彩色書ヲ表装シテ美麗ナル二冊ノ帖トナシ本會ニ寄贈セラレタリ」と被災地での活動報告が学会に対してなされており、報告書が別に存在する可能性が示唆されていることから、雑誌掲載記事の分析と平行して関係資料を博捜する必要もあるだろう。

3. 軍医による救護活動

被災地へ軍医が派遣され救護活動が行われていたことに関してはこれまでの研究にも指摘されている。

川原由佳里は²³⁾、日本赤十字社の救護活動について報告している。軍医の派遣は岩手県では県の要請で、宮城県では日本赤十字社宮城支部の事業として赤十字の補助を行ったと指摘している²⁴⁾。

山下文男²⁵⁾は、岩手県気仙郡内では「赤十字や帝国大学の医師と看護婦、陸海軍の軍医と看護卒、東京などから駆けつけた特志看護婦等々の他、県庁の手配によって集められた内陸部の医師たちが主としてその治療に当たった」ことや「村々における救護所の設置に続いて気仙郡役所の所在地である盛町の高等小学校と洞雲寺の本堂に、郡役所が管轄する臨時の病院が設置された。そのうえで村々の救護所は漸次閉鎖して患者を盛町に移送、最終的には洞雲寺の臨時病院に、残る重症者や重病人を収容して赤十字や陸軍から派遣されて来た医師や看護婦たちが治療に当たった」と報告している。郡役所

などの公共施設や寺院が救護活動の拠点をして使用されたことがわかる。

軍医の派遣に言及する雑誌以外の資料としては次のようなものがある。

官報（第3898号 明治29年6月27日）²⁶⁾には、岩手県からの報告として、第二師団より軍医12名が派遣されたことが記載されている。

内閣府の報告書²⁷⁾には、岩手県の資料を引用し軍医の活動について述べている。「18日から派遣されたのは、遠野の医師2名、盛岡赤十字社委員2名と軍医であった。彼らは重軽傷者を全て釜石尋常小学校に収容し、臨時病院を開設して救護にあたった（岩手県発行『巖手県海嘯状況調査書』）」。

『巖手公報』明治29（1896）年7月2日によると、6月25日の時点で、岩手県からの要請に従って派遣された陸軍軍医が盛地方10人、釜石地方4人、宮古地方5人（宮古から盛へ移る）いたことが記載されている。

明治36（1903）年6月宮城県発行の『宮城県海嘯誌』中の「航海日誌」には、伊里前臨時病院に陸軍二等軍医奥谷虎彌太、小泉臨時病院に陸軍一等軍医鶴田禎次郎、気仙沼臨時病院に軍医岡崎松太郎、井上好一、宿臨時病院に陸軍三等軍医吉井虎之助が派遣され、開院に携わったことが記載されている。また、青森県には青森衛戍病院より軍医2名が派遣されたことが記載されている。

岩手県の各村に派遣された軍医が明記されており（表3）、これまでに知られていた他の資料にみえる軍医名と一致する。

雑誌の内容は概ね軍医の救護活動が中心であり、重傷者への手術の実施や負傷者への治療が行われたことが具体的に記載されている。軍医の救護活動の特徴として医学的に被災者を救護していることがわかる。具体的な救護活動の記録が記載されていることが、これまでの資料とは異なる点である。

救護活動にあたり指揮系統や経費の支出についても言及がある。これは吉

表3 岩手県に派遣された軍医

地域	軍医名	
大槌	松井軍医	
釜石	齋城軍医	牧野軍医
ウツマイ	正木軍医	
吉濱	飯田軍医	梶川軍医
綾里	加治軍医	
大船渡	中館軍医	井上軍医
小友	郷右近軍医	川島軍医

『軍医団雑誌』第77号（p.1011）「岩手縣海嘯遭難者救護ノ爲メ派遣セル軍醫配置ノ圖」より作成

※『巖手県海嘯状況調査書』pp.136-141には、鶴住居（うのずまい）の地名がみえるので、表中のウツマイはこの地名に比定される可能性がある

田律人²⁸⁾が、『明治廿九年六月 肆大日記』から「陸軍省は、「災害地へ軍医及看護長差遣之義貴師団長ヨリ凜申二付許可相成候得共右ハ全ク一時救護ノ為メ徳義上差遣ノ儀特ニ認可相成候」とした上で、「救護ノ事柄ハ内務省ノ所管ニ有之候付」とし、陸軍が活動経費をすべて負担するのは不相当であると第二師団に通達している」として災害対応が内務省の所管であることを指摘している。陸軍の組織としての対応が『軍医学会雑誌』からも読み取れる。

おわりに

平成 23 (2011) 年、東北地方太平洋沖地震が発生し、津波の被害の大きさに再考させられた。災害からの教訓として明治三陸地震が取り上げられている。その際、被害の大きさ、復興過程が着目されてきた。実際には被災直後の救護活動も行われており、陸軍軍医も関係していた。死傷者数だけでなく、具体的な負傷具合、治療過程がこの『軍医学会雑誌』には記載されている。

明治 29 (1896) 年明治三陸地震の前には、明治 24 (1891) 年濃尾地震の際に名古屋近郊の軍医が派遣されており²⁹⁾、明治三陸地震後の明治 32 (1899) 年に香川県で起きた風災にも出動している³⁰⁾。いずれもそれぞれ報告は出されているが、明治三陸地震時の活動が、まとまった分量をもって『軍医学会雑誌』に掲載されていることは、やはり特筆すべきことであるように思われる。当該記事の編纂に基礎を与えた資料が現存する可能性を考慮しつつ、今後も引き続き調査を行うことで、陸軍軍医が災害救護にどのように関わっていたのか再考する必要がある。

三陸地方は、明治三陸地震以降もたびたび津波災害に見舞われてきた。すでに当時の資料が失われている可能性もある。当該雑誌の記事を他のさまざまな資料と比較検討していくことで、災害発生前後の状況をより立体的に把握することが可能になるのではないだろうか。

註

- 1) 原田敬一「軍隊と医学・医療——『軍医団雑誌』の分析を通じて——」(『15年戦争と日本の医学医療研究会会誌』4巻1号、2003年10月)。なお原田はこの論文に先立って、その著書『国民軍の神話——兵士になるということ——』ニューヒストリー近代日本4(吉川弘文館、2001年)の中で陸軍の脚気問題に論究し、「雑誌」を史料として活用している。
- 2) 山田弘倫『軍医としての鷗外先生』(医海時報社、1934年)、同『軍医森鷗外』(文松堂書店、1943年)、著者の山田自身も陸軍軍医中將の肩書きをもつ陸軍衛生部の幹部であった。なお『軍医森鷗外』については1992年に日本図書センターより「近代作家研究叢書」の一冊として刊行された覆刻版があり、長谷川泉による解説が収録されている。
- 3) 大石汎『美神と軍神と——日露戦争中の森鷗外——』改版(門土社総合出版、1993年)、同『日清戦争中の森鷗外』(門土社総合出版、1989年)。
- 4) 佐藤裕亮『鷗外の漢詩と軍医・横川唐陽』(論創社、2016年)。
- 5) 安田敏朗『近代日本語史再考V——ことばのとらえ方をめぐって——』(三元社、2018年)。
- 6) 松木明知『八甲田雪中行軍遭難事件の謎は解明されたか』改訂版(津軽書房、2007年)、同「八甲田雪中行軍遭難事件の医学的研究——『歩兵第五聯隊雪中遭難二関スル衛生調査報告』に見られる凍死者と生存者」(『日本医史学雑誌』54巻3号、2008年9月)など。
- 7) 伊木常誠「三陸地方津浪実況取調報告」(『震災予防調査会報告』11号 pp.5-33、1897年1月)。
- 8) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 平成17年3月 1896 明治三陸地震津波』http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1896_meiji_sanriku_jishintsunami/index.html(参照:2018年11月15日)。
- 9) 岡村健太郎「明治三陸津波と昭和三陸津波の災害復興政策に関する比較研究」(『歴史地震』31号、pp.125-138、2016年5月)。北原糸子編『日本災害史』(吉川弘文館、pp.276-277、2006年)。
- 10) 卯花政孝・太田敬夫「明治29年6月15日 三陸沿岸大海嘯被害調査

記録——山奈宗真——」（『東北大学工学部津波防災実験所研究報告』5号、pp.57-379、1988年3月）。

- 11) 渋谷豊盛「軍医団雑誌顛末記」（『防衛衛生』35巻4号、1988年4月）、原田敬一「軍隊と医学・医療——『軍医団雑誌』の分析を通じて——」（註1前掲論文）。
- 12) 北島規矩郎編『陸軍軍医学校五十年史』（陸軍軍医学校、p.221、1936年）。
- 13) ただし渋谷豊盛「軍医団雑誌顛末記」（註11前掲論文）によれば、

明治7年、有志の軍医が集まって医学会を設立して機関誌を発行し、これを「陸軍医事雑誌」と名付けて学術研究の道を開いたが、明治11年1月に至り、医学会を「献功医学社」と命名して社則を改良し、科目を選定して編纂し、これを「陸軍医事雑誌」と名付け、公刊雑誌として発刊した。これは第11号まで刊行されたが、同志が各地に転職四散したため一時廃刊となった。

と述べており、医学会の設立年や機関誌名が『陸軍軍医学校五十年史』のものとは異なる。

- 14) 森林太郎の「分団長に示す辞」が出されるまでの経緯については、山田弘倫『軍医森鷗外』（註2前掲書、p.245）にも以下のような説明があるので、参考として掲げておく。

同年一月九日陸達で陸軍々醫團規則が設定された。之は陸軍將校團例第六條に據りたるものであるが、我衛生部は之によつて更に鞏固なる團結を得るに至つた。左記が其の要領である。

軍醫團は現役並豫備役、後備役の將校相當官で組織する。退役者も志願によつては團員と爲すことを得。軍醫部所管區域毎に一個の分團を置く。見習醫官、見習藥劑官も分團に列せられる。上長官以上は名譽團員とする。團には軍事學、衛生勤務、軍陣醫學又は軍陣藥學の教育、集會及雜誌刊行等を行ふ。而して本職者は此等科目に習熟せしむる外、其機能に應じて軍陣醫學の一科を専攻せしめ、在郷者には主として戦時勤務を習熟せしむ。分團員を淬勵戒飾して徳性の向上に勉めしめ、又見習醫官、見習藥劑官を分團に列し團員の子弟として教導誘掖を受けさせる云々。

而して先生は團長として左の指示を分團長になされた。

- 15) 北島規矩郎編『陸軍軍医学校五十年史』(註 12 前掲書、p.222)。
- 16) 富士川游編『東京医事一覧』明治 23 年版 (p.39、1890 年 3 月)。なお本資料の活用例としては、草創期の高山歯科医学院を取り上げた北嶋まつ子・武藤優子・谷津三雄「富士川游著 東京医事一覧(明治 23 年 3 月 27 日出版)にみられる高山歯科医学院」(『日本歯科医史学会会誌』13 卷 2 号、1986 年 12 月) などがある。
- 17) 以上のような雑誌編纂の経緯については、北島規矩郎編『陸軍軍医学校五十年史』(註 12 前掲書、pp.221-224) に詳述されている。なお、『陸軍軍医学校五十年史』刊行後の昭和 12 (1937) 年から昭和 20 (1945) 年に 378 号をもって終刊するまでの経緯については渋谷豊盛「軍医団雑誌顛末記」(註 11 前掲論文) を参照。
- 18) 原田敬一「軍隊と医学・医療——『軍医団雑誌』の分析を通じて——」(註 1 前掲論文)。
- 19) 国立国会図書館 [回答]「『陸軍軍医学会雑誌』の総目次はないか。」(「レファレンス協同データベース」国立国会図書館、2018 年 9 月)、http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000242708 (参照：2018 年 10 月 24 日)。
- 20) 国立国会図書館 [回答]「『軍医団雑誌』の総目次はないか。」(「レファレンス協同データベース」国立国会図書館、2018 年 9 月)、http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000242712 (参照：2018 年 10 月 24 日)。
- 21) 国立国会図書館 [回答]「『軍医学会雑誌』の総目次はないか。」(「レファレンス協同データベース」国立国会図書館、2018 年 9 月) http://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=ref_view&id=1000242710 (参照：2018 年 10 月 24 日)。
- 22) 陸軍軍医学会『軍医学会雑誌』(76-78 号、1896 年 7 月・9 月・10 月)。
- 23) 川原由佳里「1896 (明治 26) 年明治三陸海嘯における日本赤十字社の救護活動——岩手県における医療救護に焦点を当てて——」(『日本看護歴史学会誌』24 号、pp.37-54、2011 年 3 月)。

- 24) 日本赤十字社の活動としては、宮下正弘「明治三陸津波災害の救護活動」(『日本病院会雑誌』58(7)、pp.720-722、2011年7月)や細越幸子「明治三陸大津波と日赤看護婦養成との関連」(『日本赤十字社看護学会誌』14巻1号、pp.41-49、2014年3月)がある。
- 25) 山下文男「大船渡市洞雲寺内の明治三陸津波 [1896・6・15] の犠牲者を弔う『丙申大海嘯溺死者諸精霊等』に就いて」(『歴史地震』23号、pp.157-171、2008年4月)。
- 26) 大蔵省印刷局「官報」第3898号、明治29年6月27日 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2947178> (参照：2018年11月15日)。
- 27) 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『災害教訓の継承に関する専門調査会報告書 平成17年3月 1896 明治三陸地震津波』(註8前掲書)。
- 28) 吉田律人『軍隊の対内的機能と関東大震災』(日本経済評論社、p.163、2016年)。
- 29) 陸軍軍医学会『陸軍軍醫學會震災地派出員報告』(1892年) 国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833401> (参照：2018年11月15日)。
- 30) 陸軍軍医学会「明治三十二年八月香川縣風災被害傷者救護報告」(『軍医学雑誌』107号、pp.991-1001、1899年12月)。